

うきたむ

第31号

2008. 7. 1

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高畠町大字安久津 2117 TEL 0238 - 52 - 2585
FAX 0238 - 52 - 4665



▲味噌根の石切り場

高畠石と横穴式石室の関係

うきたむ風土記の丘考古資料館

秦 昭 繁

高畠町に多い凝灰岩は縄文時代のはじめから、日向洞窟や火箱岩洞窟などの多数の洞窟遺跡で、住居その他の施設や道具として利用されました。また、古墳時代から飛鳥奈良時代の横穴式石室の埋葬施設の石材として利用されています。現代においても門柱・塀などの石材として利用されており、この地域の人々に長い期間にわたって使用され続けております。そして、小規模な石切り場が山麓に点々と現存している状態を見ることができます。

高畠石と言われているこの岩石は、凝灰角礫岩です。凝灰岩の中に10センチ以下の花崗岩・安山岩・頁岩の角礫を多く含んでいます。角礫を多く含む状態から火山の火口噴出源からの距離は、非常に近いとみられています。米沢盆地の東側の山麓地帯に多く分布しています。

終末期古墳の観察に出かけると、古墳の作られている山麓には、凝灰岩が大きな板状の岩塊となって露出している物を見かけます。このような岩塊の在り方を観察すると、古墳に利用された石材は、山麓の現地性の物が利用され支室や羨道が造られています。高畠地域の古代の人々が地域の石材・資源環境・歴史的環境にもとづいて横穴式石室を造ったことがわかります。

しかし、凝灰岩に恵まれていた地域は、米沢盆地の東側地域（奥羽山脈西側）に限られています。盆地の西側地域では同時代の墳墓形態がどのような物であったのか、今後の調査研究の課題です。さらに、同じような石材環境を背景としながら、調査研究の進んでいる他地域の研究事例も、横穴式石室の古墳研究に大いに参考になると考えられます。古代の人々が石材の資源環境にどのように適応して生活技術を開拓したのか、興味の尽きない課題となっています。

第一六回企画展紹介

「出羽国ができるころ」

期間 十月一日(水)～十一月三十日(日)まで

今年度の企画展は、「出羽国ができるころ」というテーマで、十月一日(水)より開催いたします。

展示にあたり、当館名誉館長川崎利夫先生をはじめ、研究者の方々に展示委員をお願いし、協力を得ながら準備を進めております。

和銅五年(七一二)の出羽国建国は、山形県域が律令国家に編入される意義を持ち、どのようにして建国に至ったか、そしてどのような様子だったのか、資料が少なく未解明の部分も多いこの時期のやまがたを、考古資料からみていきます。

展示の概要

山形県内の七世紀後半から八世紀前半にかけての考古資料、特に高島町・米沢市・南陽市の終末期古墳出土資料・集落跡や古窯跡出土資料を主



▲鳥居町3号墳



▲昨年度のセミナーの様子

今年もやります

ギャラリートーク

より理解を深められるという事で、毎回好評を得ておりますギャラリートークを今年も開催いたします。

今年も、館内だけでなく考古資料館から飛び出して実際の遺跡に向かい解説を行う日もありますので、ぜひ、ご参加下さい。

企画展連携の

考古学セミナー

夏といえば「うきたむのセミナー」というように、毎年恒例となりました夏季の考古学セミナーも、今年度で第10期となりました。

今年度も企画展にあわせた内容で「飛鳥・奈良時代のやまがた」をテーマに開催いたします。七月から八月の日曜日、五回に分けての講座で、講師は県内の専門研究者の方々です。

企画展開展の前に、考古学セミナーで山形の成り立ちを学習してみませんか。

資料館周辺の古墳めぐり

県内の7世紀後半から8世紀前半にかけて作られた終末期古墳は資料館周辺にも、たくさん分布しています。企画展では、これらの古墳から出土したものを多く展示しますが、その古墳はどこに、どのように残っているのか、季節の良いこの時期に、実際に古墳に出かけてみてはいかがでしょう。

資料館周辺の古墳

- ・安久津古墳 (1号墳・2号墳) 復元
歴史公園内 すぐわかります
- ・鳥居町古墳 (3号墳・4号墳)
安久津八幡神社のすぐ裏
案内標示が出ています
- ・清水前古墳 (1号墳・2号墳) 復元
国道113号線沿い

ギャラリートーク開催日 (予定)

- 10月5日 館長先生のギャラリートーク 館内随時
- 10月12日 館長先生のギャラリートーク 館内随時
- 11月1日 芸工大北野先生のギャラリートーク(予定)
館外(時間・場所未定)

*日程は変更になる場合があります。

第10期 考古学セミナー開催日

- 7月13日 セミナー①
- 7月20日 セミナー②
- 7月27日 セミナー③
- 8月24日 セミナー④
- 8月31日 セミナー⑤

各日曜日
時間 13:30～
場所 当館研修室

記念講演会 11月16日(日) 13:30～

「出羽国ができるころ(仮題)」

講演: 当館名誉館長 川崎 利夫氏

好評を得た*特別ミニ企画展*

『平安時代のカレンダー』展

(平成二〇年四月十五日～五月二十五日まで)

平安時代のカレンダー

具注暦

平成二〇年度最初の展示は、米沢市教育委員会とまんぎり会のご協力により、平安時代のカレンダー「具注暦」を展示しました。

具注暦は、奈良・平安時代の律令政府(朝廷)が用いた暦で、易によって日に意味づけを行い、吉凶や禍福などを示したものです。中央や地方の役所で行事や仕事を行う上で使われた、役人にとって便利なものでした。

このような暦は発掘調査などにより全国で十カ所ほど発見されています。

大浦B遺跡と

漆紙文書

今回展示した具注暦は、米沢市北部中田町にある大浦B遺跡から発見された漆紙文書で、たまたま漆が付着したた



▲復元された具注暦の展示

め残ったものです。

この遺跡は奈良時代後半から平安時代前半にかけて営まれた、地方の役所跡とみられています。堀に囲まれた区画の中に大型の掘立柱建物跡などが多数見つかっており、隣接する大浦A遺跡と合わせて広い範囲を有しています。八世紀後半から九世紀初頭には置賜郡衙(ぐんが)が置かれたとみられています。見つかった漆紙文書には、

具注暦延暦二十三年(八〇四)十二月十八日から二八日の部分がかかれていました。



▲展示の様子

具注暦の

記載事項

具注暦は、毎年度の陰陽寮で作成したものを中務省(なかつかさしやう)を経て各役所に配布されますが、地方役所では役人が出向いて書き写しました。出羽国府の秋田城まで出向きました。そのころの秋田周辺は蝦夷(えみし)との戦争でとても緊張していたようです。

暦は上中下三段に分かれ、上段は日付・干支・納音(なっちん)・十二直、中段は二十四

節気と七十二候、下段は暦注(注意事項)がかかれていました。

これらの組合せにより吉兆・禍福(かふく)を見いだし、この日は沐浴(もくよく)をする、しない、といったように行動に結びつけていました。

現在にも

受け継がれる暦

平安時代の暦ですが、干支や立春・立秋・冬至・夏至といった二十四節気などは現在の暦にも見ることが出来ます。古代から長い時間の中、形を少しずつ変えながら途絶えることなく、続いてきた日本の歴史をカレンダーという身近なものを通じて感じ取る事ができるのではないのでしょうか。

* * * * *

今回は、短い期間の展示となりましたが、好評につき、各方面からの要望もあり、十二月から再び展示する予定となりました。見逃してしまっただ方、もう一度見たい方は、是非この期間にご覧くださいませ。

職員紹介

四月より、新たに秦昭繁が加わりました。今年度、職員五名体制で頑張つていきます。よろしくお願い致します。

赤ちゃん手形に

桐箱登場

毎年大好評の「赤ちゃんの手形づくり」体験ですが、手形の保管に箱が欲しいとの要望にお応えして、八回目の開催を迎えた今年度は、桐箱をご用意いたしました。一つ五百円で頒布しております。

箱に入れて可愛く保管できますよ。



米沢盆地を代表する終末期古墳

木和田古墳

木和田古墳は米沢市東部の古館山から延びる尾根の南側山麓斜面に立地しています。昭和二六年に地主の斎藤文太郎氏がブドウ園造成時に塚を掘ったところ、古墳の一部が現れました。この事を当時上郷中学生徒の平間重光さんが先生に報告しました。先生は山形大学の故柏倉亮吉氏に連絡し、同年に山形大学を中心としたグループによって簡単な調査が実施されました。その後平成九年十月～十一月に米沢市の教育委員会によって調査が実施されました。

調査によって墳丘の規模は、東西十二・九メートル、南北十五・八メートルの楕円形を示し、高さは一・一メートルの山寄式の円墳であることが判明しました。蓋石・羨道の一部が既に失われていました。玄室・玄門は良好に残っており、追葬時の遺物とさ

り、玄室は全長三・五メートルと大型で、奥壁は一枚岩を使用し側壁は数枚の大小の岩を使用しています。側壁の石は二段重ねまで確認されていますが、造られた当時はさらに数段の積み石があり、蓋石で覆われていたものと考えられています。玄門は左右対称に框石の両側に設置され、羨道は西側に一個確認され他の石は失われていました。石室は凝灰岩を利用して造られており、近くの石材を使用し、角礫を含まないという特徴があります。

米沢市教育委員会の調査時の出土遺物は、土師器片十一点、須恵器片二点、中世陶器一点が出土しています。古墳の年代を示すものは、墳丘から出土した土師器片で、無段丸底坏があり、国分寺下層式の八世紀前半の年代が想定されていますが、追葬時の遺物とさ

れています。築造年代は、七世紀後半と推測されています。同じような横穴式石室の形態を持つ、高島町の安久津古墳群の石室との違いは、石室内の側壁を形成している腰石の違いとなって現れることが多く、安久津古墳群の腰石は大型の一枚の角礫凝灰岩を使用し方形に造られることが多いのに対して、周辺部の米沢市や南陽市で確認された横穴式石室の石室は、胴張り構造を採用し複数の大小の岩を使用し造られています。このような石室構造の違いは、石材環境に左右された構造的な違いともみられています。



▲木和田古墳 全景

我が館の展示品(21)

弥生時代の壺形土器

(まんぎり会 所蔵)

常設展示室、弥生時代の

コーナーに、ひときわ目立つ大きな壺形土器(長頸壺)と、小型の壺形土器が三点ほど展示してあります。渦巻文や方形文といった文様と、斜めに縄文を施した斜縄文などが見られ、東北地方の弥生式土器の特徴が窺えます。

これらは米沢市万世町にある清水北(堂森)遺跡から出土したものです。

昭和四五年に堂森遺跡調査団によって発掘が行われ、多くの壺形土器が見つかっています。調査の結果から、この遺跡は弥生時代のお墓の跡としての性格が強いことがわかりました。

展示してある壺形土器は、実は弥生時代のお墓だったようです。しかし、口の狭い壺形土器では人間を入れて埋葬することはできません。では、どうやって埋葬

していたのでしょうか。

この頃の東日本では、一般的に、死んだ人を一度埋葬し、一定の期間をおいて腐って骨だけになったところを取り出してもう一度埋葬する、という方法を取る傾向が強かったようです。このようなお墓のことを再埋葬と呼びますが、展示してある壺形土器も、この方法で、骨だけはこの壺形土器に入れて埋葬したものであるのではないかと考えられています。



◀壺形土器